

言心先生の中国便り

本校の娘婿は
今年のノーベル賞
の受賞者

十月八日、中国の安徽省の蚌埠市第一中学校の大きな電子掲示板で、「本校の娘婿が2014年のノーベル化学賞を獲得した事を熱烈に祝う」と掲示された。

この中学校の女性卒業生、吉娜氏は、後に名門の中国科学技術大学の物理化学学部に入學し、2000年にアメリカの大学に研究の目的で留學した。同じ研究室に所属していたことがきっかけで、彼女は今年のノーベル化学賞の受賞者ベツイヒ氏と出会い、後に結婚した。

蚌埠市第一中学校の近くに住んでいる人が、このニュースをネットに投稿した。そして、大勢の人が皮肉な言葉でそれに応えた。「この学校の教

育の質と何にも関係ないだろう!」「有名な親戚に成りたいのではなからか?」「これからこの学校はもつと良い女性を育てて、未来のノーベル賞の受賞者と結婚させればよい」等である。

毎年十月の初め、中国はいつもノーベル賞に対して期待と失望の雰囲気がある。今年も、海外在住の中国人が物理学賞と化学賞受賞の可能性が高いと予想されたが、結局外れた。一方、日本の三人が今年の物理学賞を獲得したことに對して、中国の各界は再び衝撃を受けた。

世界中で一番自然科学系のノーベル賞の受賞者を輩出しようと画策している国は、実は中国である。改革開放後、中国政府は本土の科学者がノーベル賞を取る為、沢山の計画をたて、相当なお金を投資したが、今でも受賞までは届かない。

今年もなぜ中国本土の科学者がノーベル賞を取れない

かという討論が盛んに起こった。

専門家は、海外在住の何人かの中国人が自然科学系のノーベル賞を取ったが、彼らは全員1949年以前に中国で教育を受けた人であり、つまり1949年以後に中国大陸で基礎教育を受けた人は海外に出て、国に残っても、ノーベル賞を二人も取っていないと指摘した。

中国の小学校六年間の教育は洗脳の為、受験の為、使いやすい道具になる為の教育で、人間の創造性を無くし、自然科学に對する熱意を喪失させ、当然、そういう人は自然科学の最高名誉のノーベル賞を獲得することは言うまでもなく無理であろう、とある教育専門家は中国の教育制度を痛烈に批判した。

